

社会福祉協議会の相談から考えるつながりづくりとは？

- 中野社協が目指す地域づくり

社会的孤立を生まない人と人がつながる地域づくり

第4次中野区民地域福祉活動計画(2024年度～2028年度)

- 計画策定にあたり課題となったつながりづくりの考え方

これまでの地域活動は、対面でのつながりから始まっていた

相談支援も同じく、相談窓口又は相談者自身が何らかの形でアクセスすることにより支援につながっていた

→居場所づくりを進めることにより、つながりを作ることに取り組む
多様な相談を受け止める福祉何でも相談を設置し相談を受け止めた

これまでの取り組みから見える課題

- 居場所活動に来られない人、来ない人の方が課題がある
- 新型コロナウイルス感染症による対面での活動の変化
- 多様な人が暮らす都会における近隣同士の希薄化や家族関係の希薄化
- SNSやインターネットなど情報収集のツールの多様化(情報にアクセスするツールは増えているが、情報を選択しアクションを起こすまでに至らない)
- 課題を抱えている人や困っている人ほど、相談につながらない
- 多様な人がいる中で、相談窓口や制度が課題にフィットしていない

→誰もが生きやすい地域を作るためには、どのような取り組みやつながりがあると良いのか一緒に考え、みんなで作っていくことが必要である。

これからの地域づくりの社協のキャッチフレーズ 「MEをWEにする」

参考：地域懇談会で出された意見(2024年度実施)

～第4次中野区民地域福祉活動計画の重点事業についての意見～

重点事業①多様な居場所を作る

- ・施設でカフェを運営しているが、コロナかで参加者が減少し、今もなかなか戻らない。子どもたちにも参加してほしい。
- ・男性が参加しやすい居場所が必要。
- ・子どもが来たくなる居場所を作りたい。子どもの部屋遊びイベント
- ・サロン参加者はいつも同じメンバーとなってしまう。
- ・世代を超えて参加ができる居場所があったら良い。
- ・多世代が交流できる居場所。
- ・高齢者も障害のある方も活躍できる場を作りたい。
- ・自分の活動を通じて「居場所は大事」と感じている。
- ・サロン活動がよりもっと生活圏内にできればいい(マンションの集会室、スーパーの一角)

重点事業②活動のすそ野を拡げる

- ・コロナ禍で若者は外出すると注意された。「地域活動に参加してほしい」と言われても、「いまさら何？」と思ってしまう。
- ・支え手は大体人が固定化されている。
- ・サークルの集まりのメンバーがなかなか増えていかない。
- ・活動したい人と参加したい人をマッチングする仕組みがあったら良い。
- ・大学生の活動の場は、地元より大学近くの方がなじみがある。その方が地元より匿名性を保てる利点がある。
- ・一人の人が一人にチラシを持っていく。これを重ね、地域活動への参加の輪が広がっていく。
- ・地域のお祭りは、参加のハードルが低く、声をかけるきっかけになりやすい。
- ・子どものころから地域の活動を見ることが大事。
- ・参加しにくい人には活動があるよという声かけをして情報を伝えていくことが大切。
- ・ひとりの人が頑張るのではなく、みんなが少しずつボランティアができる雰囲気のみち

重点事業③必要な人に情報を届ける

- ・情報の伝え方について、対面だけでなくオンラインを活用してはどうか
- ・気軽に声をかけてくださいマーク(シール等)を作って自分に貼る又は携帯するなどして、街中で声をかけやすくてきたら良い。
- ・情報過多。取捨選択が難しい。
- ・SNSやインターネットは今後も欠かせないツールだと思うが、できる人とできない人の差が大きい。
- ・街のお助けスポットが分かる地図がある。
- ・広報の難しさを実感している。掲示板に貼ったり、手渡ししているが、必要な人に届いていないと感じる。地域の情報を戸別配布できるような仕組みがあれば良い。
- ・個人情報の壁が大きい。民生児童委員の持っている情報と、地域活動をしている人がしっかりとつながって動くことができれば、単身独居の人などにもっとアプローチでき、孤立を防げると思う。
- ・広く活動を区内に伝えていく工夫(病院、美容院、床屋など)

重点事業④一人ひとりのニーズに合わせた支援につなげる

- ・孤立は経済力に関係ないと思う(お金があっても孤立している人はいる)
- ・居場所に行けない人が孤立している。社協や区で支援をしてほしい。
- ・外国から移住している方が今増えつつあるので、中野での生活を過ごし役する広報をお願いしたい。
- ・障害の種別に関係なく理解しあえる社会。マイノリティがマイノリティでなくなる。
- ・誰もがちゃんとしたお給料をもらえる仕事ができるように
- ・放っておいてほしい人は放っておいてくれる(が、必要な時には声があげられる)
- ・若者がすんなり入れるまちづくり
- ・病気や障害を抱える人たちが孤立しないまち
- ・認知症は誰にでもあり得ること。認知症になってもならなくても安心して暮らせる地域を、地域の人と作っていきたい。
- ・今度は一人でいることに不安を感じはじめ、おひとり様サバイバルの会を始めた。同じ境遇にある人と一緒に過ごすことで、楽しく乗り越えたい。

リカバリーできる地域とつなげる地域力

例えば…

①ひきこもり支援での取り組み

区内社会福祉法人等連絡会で就労体験の場づくり
地域の活動団体にボランティアで参加する場をつくる

②フードパントリー事業を通じて支援のきっかけづくり

③居場所に来られなくなった人をつなぐ仕組みづくり

認知症状がみられるスタッフが参加しにくくなる

④不登校の子どもの居場所づくり

⑤地域に出向くことで相談がつながる(気になる人や声をつなぐ)

⑥当事者同士のつながりをつくり、一緒にいることのメリットをつくる

⑦何かあったときに相談できるところや人を作ること

多様なアクセス方法と
見つけるためのアンテナ
機能を地域の中で
作ること

安心して相談できる
距離感を作ること

地域の既存の取り組みや制度ではなく、新たに作ることや新たな役割
を作ることの必要性